

研究ノート

看護大学生の就職先選択の決め手 ～就職先決定選択のための効果的なキャリア支援策を考える～

Decisive Factors in the Choice of Employment for Nursing Students

～Thinking about Effective Career Support Measures in Job Placement Decisions～

能登由美子 澤田みどり

Yumiko NOTO, Midori SAWADA

旭川市立大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：就職先 職場選択 臨地実習制限 キャリア支援

抄 録

本研究は、制限された臨地実習体験を持つ看護大学生が、何を就職先選択の決め手としているのか学年ごとに調査し、就職先選択へのキャリア支援を提示することを目的としている。

看護大学生2年生から4年生までの協力が得られた84名を対象に就職先選択の決め手、どのようなことに着目して就職先を決定したか、就職に関しての相談相手は誰かについて調査した。その結果、就職先の決め手や着目する内容に関しては学年に差がみられた。反面、学年に関係なく共通した項目は、相談相手に親を選択していた。本研究の結果から、今後の教育指導やキャリア支援でおこなうべき内容と対象が示唆された。

I. はじめに

2022年日本看護協会の病院看護実態調査¹⁾によると、新卒看護職員の離職率が10.3%に増加し、その理由にCOVID-19が影響している(38%)と報告されている。一方で、新人職員離職の原因は職場におけるリアリティショックが要因²⁾であるとも示されており、COVID-19が引き起こした職場の混乱だけが、新卒看護職員の離職率増加の原因とは言い切れない。しかし、本研究の対象者は、COVID-19により、臨地で体験して学ぶことが難しい状況に置かれた学生たちである。佐居他³⁾は、臨地実習に必要な要素として「職場と自分の看護観の違い」を経験することを挙げているが、本研究対象の学生たちは、看護観の違いに直面する場面や体験する機会、学びを経験していない。さらに、就職先選択の一助となる職場見学会や就職説明会も中止、またはオンラインでの開催となっている。澤田⁴⁾は「コロナ禍にある学生は、自分の興味関心のあ

る部分や少ない情報から就職先を選択、決定しなければならない状況になっている」と臨床の現場を体感することなく、就職先を決定していると就職調査結果で報告している。

主観ではあるが、今どきの若者の特徴に目を向けてみると、いわゆるZ世代と言われる学生たちは、短時間での情報収集やSNSなどを通じた仮想での他者との交流での情報収集や関係性の構築を得意とする。そのため、実習でロールモデルとしての指導者や看護師の行動や他者の言動に触れることが少ないことに、疑問や問題を感じていないのかもしれない。だからこそ、体験しながら医療の現場で対象者の個別性、人間性を感じ取ることが必要だと考える。このような臨地実習での体験ができなかった学生たちに対する現在のキャリア支援は、就職先選択のための効果的な支援となっていないのではないかと考える。

本研究では、制限された臨地実習体験を持つ看護大学生が、何を決め手として就職先を決定しているのか

を調査し、効果的なキャリア支援を提示することを目的としている。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象者

A市立大学保健福祉学部保健看護学科在学中の2年生61名、3年生63名、4年生59名

2. 調査方法

無記名によるオンライン（Microsoft Forms）独自に作成したアンケートに各学年に研究目的を口頭で説明し入力協力依頼をする。入力期間は7日間とする。

3. 調査内容

就職先選択の決め手、どのようなことに着目して就職先を決定したか、就職先を決定するにあたって相談する相手は誰か。

4. 調査期間

2023年9月～10月

5. 分析方法

単純集計分析

6. 倫理的配慮

Formsは無記名の設定とする。学生への説明時および配信時に、アンケートの目的、参加は自由意思に基づくこと、調査協力への同意が得られない場合でも、成績などへの不利益は被らないこと、調査結果は研究以外の目的では使用しない。またこの結果は「旭川市立大学保健福祉学部研究紀要」に掲載する。得られたデータは研究終了後速やかに消去することを口頭説明および記述した。なお本研究は、開示すべき利益相反はない。

Ⅲ. 結果

1) 回答率

回答数84名（45.9%）、2年生13名（21.3%）、3年生43名（63%）、4年生28名（47.5%）であった。

2) 単純集計の結果（図1・2・3参照）

【就職先選択の決め手】

3年生では、インターンシップ（19.3%）や企業主催の就職説明会（18.1%）など企業と対面できる項目

が37.4%を占める一方で、4年生では20.7%であった。4年生の回答では、病院のホームページ（17.3%）や病院パンフレット（15.5%）が32.8%であった。学校で開催された就職説明会と回答している学生は、3年生・4年生ともに大差なく10%前後であった。2年生は、病院のホームページを閲覧している学生は数名のみであった。就職説明会は、企業主催と大学主催があり4年生では大きな差はみられないが、3年生で企業主催が優位であった。実習に関しては3年生7.2%、4年生13.8%が回答されているが、2年生は実習体験をしていないため、18.2%の回答の意図は不明である。

多くの学生は複数の媒体から就職先選択の決め手を得ているが、「親からの勧め」（3年生3名）、「企業主催の就職説明会」（3年生4名・4年生2名）、「病院のホームページを見て」（4年生5名）、「インターンシップに参加して」（4年生1名）の学生は、一つの媒体のみで就職先を決定する決め手となっていた。

【どのようなことに着目して就職先を決定したか】

3年生では、福利厚生（14.8%）・給料手当の良さ（14.8%）・教育・研修体制（14.1%）が上位を占め、次いで人間関係（10.3%）・職場の雰囲気（9.6%）であった。4年生は教育・研修体制（15.2%）・給料手当の良さ（13.6%）・職場の雰囲気（13.6%）が上位を占め、次いで自分の目指すものがあつた（10.6%）・病院の規模（10.6%）であった。2年生は、職場の雰囲気（21.7%）・人間関係（18.9%）が上位であった。

【就職先を決定するにあたって相談する相手は誰か】

3年生（51.2%）、4年生（50%）ともに半数以上が親と回答している。次いで教員で3年生（18.6%）、4年生（32.1%）であった。就職先を決める決め手としては親からの勧めは上位ではないものの、相談相手としては半数以上が親と回答している。

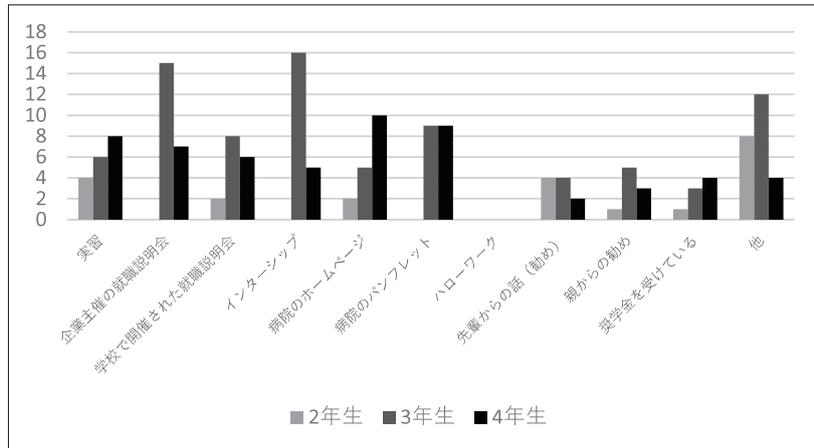


図1 就職先の決め手は何ですか

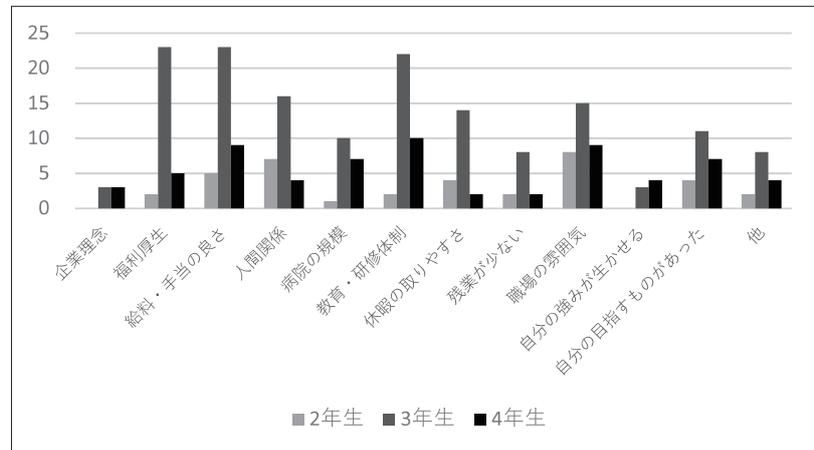


図2 どのようなことに着目して就職先を決めましたか

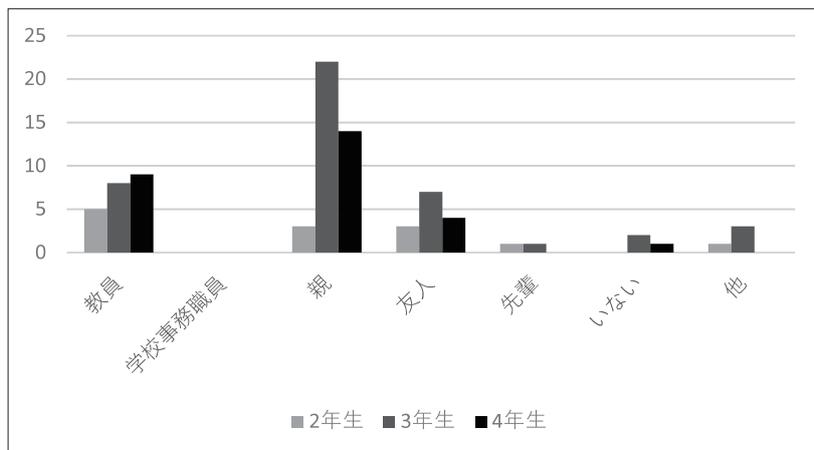


図3 就職先を決めるにあたって相談する相手はどなたですか

IV. 考 察

COVID-19の感染症の位置づけが変わり、3年生は、実習に関する日数・人数や実践の制限がある中でも臨地で実習、体験し感じたことをもとに、対面で就職活動を行うことが可能となっている。しかし、4年生は、大学入学直後より行動自粛を余儀なくされ、臨地実習がほとんどできないことに加え、制限された中で就職活動を行っていた。就職先選択の決め手や着目点に対して、3年生は対面情報をもとにし、4年生はパンフレットやホームページを参考に就職先を選択していることがわかる。水田⁹⁾は、「新卒看護師は病棟における複雑な人間関係の確立には慣れていない」ことがリアリティショックの要因であり、解決するためには「職場の人間関係の調整」が一つの役割を果たすと報告されている。学生は就職先の「人間関係」に着目すると回答しているが、水田⁹⁾によれば、「現代の若者は指摘や注意を受ける経験が少なく、指摘されることの不慣れさがある」と人間関係の調整に対して課題を持っていることも述べている。つまり、臨地で学ぶ機会が少ない学生たちが、臨地での実体験がないことや適切な支援なく就職先を選択してしまうことは、リアリティショックを増幅させ、離職に繋がる多くの要素を含んでいるのではないかと考える。臨地での実習体験が少ない学生は、学内実習で見慣れた教員や気心の知れた学生仲間を模擬患者として、看護実習を体験している。臨床現場の緊張感のある中で指導者や患者と関わり、リアリティある指摘や注意を受ける経験が少ない。さらに、新たな人間関係を構築する機会や経験も少ない。その結果、臨地実習体験の少ない学生たちは「職場の理想と現実との乖離」や「先輩看護師との関係性悪化」・「自身の技術の未熟や技術の習得困難」¹⁰⁾に直面することで、リアリティショックを受け、離職に繋がっているのではないかと推察する。このことは、表2の【どのようなことに着目したか】に示されている。3年生は福利厚生や給料と具体的な回答であるのに対し、実習体験の少ない4年生は教育体制や病院の雰囲気と回答しており、教育を受けることや人間関係を構築することに対して受け身であることが表れる。人間関係の構築に不慣れな学生へのキャリア支援対策としては、人間関係構築に関する接遇やコミュニケーション技術などの講習会の設定、より身近で学生に近い存在である卒業生を招き、話が聞ける機会を設け臨床をよりリアルにイメージできることが効果的であると考えられる。

就職に関する相談相手に「親」と学生の半数以上が回答している。尾花ら⁷⁾は、「親は子どもに良い企業に就職してほしいといった期待を持っているが、その親の期待は子ども自身が望んでいることとは不一致が生じている」と考察している。また佐山⁸⁾は、「学生が主体的に職業選択するには親が干渉しすぎないことであると指摘し、親が助言者としての立ち場に立つことは自己効力を高めるが、監督者になると逆効果である」と親の介入に対して指摘している。しかし今回の対象学生たちは、親との信頼関係が成り立っているのか、学生に自立心がないのか、知らない臨床への不安が強いのか、相談相手として親を選び、就職後も支援してもらいたいことを望んでいるように推察できる。尾花や佐山らの参考文献とは反対の結果といえる。これらのことから考えると、親が子どもに適切な助言をするためにも、学生を対象とした就職説明会にも、親の参加が必要になってくるのかもしれない。また、教員は、親を含めた面談の検討も必要となるのかもしれない。現状では就職支援の専従ではない看護教員が就職先決定の助言を行っている。限られた時間の中で、学生にとって効果的な支援となるよう対策するには、看護教員のみでは限界がある。石母田他⁹⁾は、就職支援が専従ではない委員が限られた時間で学生にとって満足いく支援には、リアリティある講座内容の構成が必要と述べている。学生個々の相談内容や希望に合わせて、就職に詳しい事務職員と、学生の個別性に詳しい教員が協働し、十分な情報共有を行ったうえで、学生と親へ丁寧な対応が必要となってくると考える。また、就職活動中の学生は、実習や看護研究など多忙な時期である。安易な気持ちや焦りから就職先を決定しないよう、学生の特性を知る教員は、思いを理解し、自分にあった施設であるかを検討できるよう多くの情報を提供し、助言や相談に乗ることが大事なキャリア支援の一つであると考えられる。

安達¹⁰⁾は、大学におけるキャリア支援だけでは、職場選択や就労効果を持続させることの難しさを述べている。昨今では、就職先選択の決め手とリアリティショック軽減や離職防止のための方策として、臨床側が基礎看護学実習を終えた学生を対象に、アルバイトと称して臨床の現場で看護実践体験を進めている。大学としては、早い段階で学生に情報提供し、体験学習を勧めていくことも大学の役割であり、一つのキャリア支援となるのではないかと考える。

V. 結 論

- 1) 臨地実習を経験した3年生は企業との対面によるインターンシップや就職説明会が、4年生はホームページおよびパンフレットを活用することが病院選択の決め手となっている
- 2) 就職先選択にあたりどのようなことに着目しているのかについては、3年生はより具体的な就労条件を求め、臨地実習経験の少ない4年生は教育体制や人間関係構築がしやすいなど受け身的な条件を挙げている
- 3) 相談相手は学年間で差はなく、親を選択している者が多い
- 4) 臨地実習体験の機会を少しでも多くできるよう、臨床と話し合い調整することが必要である
- 5) 事務職員と協働し、学生と親へ丁寧な対応が必要である
- 6) 学生へ就職先の情報を十分に提供し、検討できるよう支援する必要性がある
- 7) 臨床で進められている看護実践体験を早い時期から学生に周知する

研究の限界と課題

本研究の回答率が50%を下回っていることは調査方法の限界である。感染対策の変化に合わせて調査を続けキャリア支援について今後も追及していきたい。

引用・参考文献

- 1) 公益社団法人日本看護協会広報部：News Release 2022年「病院看護実態調査」結果, 2023. <https://www.nurse.or.jp> (2023.6.5)
- 2) 糸嶺一郎・鈴木英子・叶谷由佳・佐藤千史：大学病院に勤務した新卒看護職者のリアリティショックに関与する要因, 日本看護研究学会雑誌, 29, 4, 63-70, 2006.
- 3) 佐居由美・松谷美和子・平林優子・松崎直子・村上好恵・桃井雅子他：新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方, 聖路加看護学会誌, 第11巻, 1号, 100-108, 2007.
- 4) 澤田みどり：新型コロナウイルス感染（COVID-19）拡大前後の看護学生就職情報の経年別推移－COVID-19の看護学実習への影響と就職先選択の関係を検討－, 旭川大学保健福祉学部研究紀要, 第15巻, 75-79, 2023.
- 5) 水田真由美：新卒看護師の職場適応に関する研究－リアリティショックからの回復過程と回復を妨げる要因－, 日本看護学会誌, 23, 4, 41-50, 2004.
- 6) 柏田三千代：新人看護職員の早期離職理由－心理的プロセスの検討－, 日本国際情報学会誌, 15巻, 1号, 46-54, 2018.
- 7) 尾花真梨子・倉田由美子・神崎亮佑：大学生の認知した親からの期待と養育態度がアイデンティティに及ぼす影響, 江戸川大学紀要, 第32号, 165-174, 2022.
- 8) 佐山公一：職業選択に対する大学生の自己効力に親はどのような影響を与えるか?, 北海道心理学研究, 第44巻, 1-14, 2022.
- 9) 石母田由美子・岡田康平・木村涼子・鹿野卓子・杉本篤美・鈴木博美他：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下における看護学生への就職支援：仙台赤門短期大学の場合, 伝統医療看護連携研究, 第2巻第2号, 38-43, 2021.
- 10) 安達智子：大学生のキャリア支援－その心理的背景と支援, 日本労働研究雑誌, 533, 27-37, 2004.